



復興後押し! 「フラワー作戦」



ドライバーに花苗の鉢を手渡す生徒

巨理高校では、交通安全を呼び掛ける伝統行事「フラワー作戦」を行っています。これは、普通科園芸コースがある巨理高校の生徒が実習で育てた花苗を、ドライバーや通行人に手渡ししながら安全運転を呼び掛けるもので、1984（昭和59）年から毎年春と秋に行っています。

2014（平成26）年は、伊具高校の生徒が手がけた花苗も提供され、合わせて600鉢ものマリーゴールドが準備されました。

学校のある巨理町の沿岸部は、東日本大震災の津波により甚大な被害を受けました。現在も復旧・復興に向けた工事が進められています。

そのため、復興事業に従事する工事車両も多く通行している主要地方道塩釜巨理線沿いに、生徒会や交通安全委員及び奉仕委員と農業クラブの役員ら約80人が集まり、「安全運転をお願いします。」と交通安全を呼び掛ける一言とともに、鮮やかな色に咲きそろう花苗を手渡していました。

ドライバーの皆さんも笑顔で受け取っていました。

復興に向けてがんばっている方々に、気持ちよく働いてもらいたい、そして、すべての人たちに事故のない安全な町にしたいという思いを伝えています。花をもらった方々も、参加している生徒たちも笑顔があふれていました。

さらに、学校付近にはまだ仮設住宅があり、自分たちのできることで寄り添っていこうということから、そこに住んでいる皆さんにも花をプレゼントし、交流を図っています。



巨理高生による安全運転の呼び掛け



防風林あとに希望の桜を



研究成果を確認する生徒たち

県農業高校では、2012（平成24）年6月、科学部の1年生と担当教諭が名取市などの津波被害を受けた地区を訪ね、仮設住宅に暮らす被災者から話を聞きました。家屋だけでなく、黒松などの防風林も流され、殺伐とした故郷の様子を寂しそうに語る被災者の姿を見たことをきっかけに、自分たちにできることはないかを話し合いました。

名取市の沿岸部にあった同校の校舎も津波の被害を受け、市内の仮設校舎で学んでいます。震災前は校舎に20本以上の桜の木がありましたが、津波で残った4本が地域に希望を与えたことから、同部の大久駿さん（当時15歳）が「桜は日本の古里の象徴。防風林があった場所に桜を植樹し、震災で心に傷を負った人を癒やしたい。」と、東日本大震災で津波被害があった太平洋沿岸部の地域に桜を植える「復興桜」プロジェクトを始めました。

しかし、津波被害に遭った沿岸部の土壌は塩分の濃度が高く、通常の手法で植樹すると枯れてしまう恐れがあります。そこで塩分濃度を下げる植栽法を研究し、現場で取り組む除塩対策を調べ、実際に被災地に向いて土壌も分析しました。その夏から毎週のように名取市や巨理町の沿岸部に向かううちに、仮設住宅で暮らす方々もプロジェクトに期待を寄せ、堆肥に使う木の葉を集めてくれるなど交流が深まり、その年の11月には7地区で被災者と150本の桜の苗木を植えました。それでも、除塩対策をしても生育するのは通常に比べて5分の1程度。そのため今後も対策の研究を進めながら、3月には塩害や潮風に強く、香りも良いハマナスとバラも植える計画で、生育状況を被災者に知らせる手作りの「サクランド新聞」も定期的に発行しています。

プロジェクトを進める相澤昂弥さん（当時16歳）は「震災で壊滅的な被害に遭ったのに、桜の開花を夢見て協力してくれる方々の姿に胸が熱くなりました。復興して桜の街にしたい。」と意気込み、震災でつらい思いをしている方々が、満開の桜で元気になってくれることを夢見て、研究を進めました。

さらに、県農業高校では、学校での学びを生かし、地域に貢献するさまざまな取り組みが進められています。



私たちがこれまで学んできたことを生かしたり、地域の方々と関わる中で、自分たちが何か役に立てることはないか話し合ってみましょう。